



ア メリカに行くと、その土地のFM局にチューニングする。大きいラジオ局は選曲が似ているが、小さいコミュニティラジオはバラエティに富んでいる。クリエイティブで、さまざまな音楽が流れてくる。移動しているうち、同じチャンネルなのに、局が変わることもある。いきなりネイティブアメリカンのチャントが流れてきたりね。その土地ならではの音楽を聴くのが、旅の醍醐味でもあるんだ。その土地を味わう方法のひとつだ。

なかにはカントリー専門のFM局もある。アメリカのフリーウェイに、カントリーほど似合う音楽はないと思う。回りは乾いた砂漠、前後に車が走っていない、そんなところを夕日に向かって走っている時、カントリーが流れてくると気持ちが盛り上がる。70年代のカントリーロックはギター1本と歌だけでできている。きっとイーグルスに影響されているんだろう。今でもアメリカで一番聴かれているのはカントリーだ。フリーウェイを走ると、その理由に納得するだろう。アメリカはカントリーの国だ。

Turn Me On, I'm A Radio **Scene 02**



ラジオを地元局にチューニングし、ハイウェイをひたすら走る



Take Only Pictures, Leave Only Footprints **Scene 03**

ト ラックのように大きいキャンピングカーでアメリカの国立公園の走り続ける。走っても走っても、素晴らしい景色が続いていく。だから写真を撮っても切りがない。すべてが美しく、壮大だから。伝えきれない。撮りきれないんだ。その場に立って、初めてその壮大さがわかるんだ。

今回はLAに入り、ラスベガスを出てザイオン国立公園に向かい、その後レッドキャニオンを経てブライスカニオンへ向かった。その翌日はアーチーズ、そしてモニュメントバレーへ。国立公園はビュースポットに続くハイキングコースがいくつも

あるんだけど、そのコースは急な崖になっていても、柵がついていないことが多い。日本だったらあり得ないだろう。本当にいつ人が谷底に落ちてもおかしくない場所がいくつもあからね。アメリカにはこんな言葉がある。「Take only pictures, Leave only footprints」(撮っているのは写真だけ、残しているのは足跡だけ)。道に落ちている松ぼっくりも持っていくのはいけない。もちろん、ゴミも残してはいけない。アメリカでは、景色をそのままの形で残しておこうという精神が根付いているんだ。



George Cockle in the U.S.A
ラジオDJ ジョージ・カックルの
アメリカ モーターホーム 親子旅

ラジオDJとして活躍するジョージ・カックル。息子のブルー(16歳)と一緒にモーターホームでアメリカ大陸を旅することにした。赤土の大地から聞こえる音楽、ラジオ、ルート66を語る。
文&写真・小島直子 取材協力・トラベルデポ <http://www.motor-home.net>



2017 2006

ジョージ・カックル / George Cockle
1956年鎌倉生まれ。日本人で日本舞踊の師匠の母と、アメリカ人でヨットマンの父を持ち、幼少時代を日本・テキサス・韓国で過ごす。音楽番組「ジョージ・カックルのレイザーサンデー」(インターFM / 毎週日曜11:00~15:00)などのラジオ・パーソナリティをはじめ、雑誌「サーファーズ・ジャーナル」のディレクターや音楽誌への執筆、トークショー、サーフイベントのMCなど多方面で活躍。著書にはエッセイ本「100のジョージ・カックル」、絵本「BEACH GLASS」、最近では「ジョージ・カックルの鎌倉ガイド」を出版。実は無類の読書家でもあり、歴史、音楽に関する本には目がない。
<http://georgecockle.com>

We're Ramblin' Men Again **Scene 01**

僕 の息子の名前はブルーという。今、16歳だ。彼が5歳、僕が50歳の時、シカゴからロスまでルート66を走ったことがある。最初は自分ひとりで行こうと計画を立てていたが、「僕も行きたい、僕だってアメリカ人だから!」と言われ、連れていくことになった。

あれから11年。またルート66を走ろうという話になった。5歳だった頃の記憶は、もうポツンポツンとしかない。でも16歳になれば違うだろう。僕はアメリカ人の親として、アメリカに対していい印象を持ってもらいたかった。例えば、アメリカの芝生はいつでも緑が美しいと感じる。そう、アメリカは人生を楽しむために出来ていると思うんだ。すべてがエンターテインメントでできている。ブルーにもアメリカ人の血が流れているし、パスポートだって持っているから、なるべくいろいろなところへ行行って、いろいろな人に触れて、アメリカを肌で感じてほしいと思った。

そして今回のモーターホームでの旅。エンジンをかけて走ろうと思った時、ブルーはちょっと待って、これかけて! と叫んだ。ブルーの手にはiPodと、ボーズのスピーカー。「ランニング・オン・エンブティアーをかけてよ!」ブルーはこの旅のオープニングにジャクソン・ブラウンの曲を用意していた。ブルーのなかでは、アメリカ=ジャクソン・ブラウンだったんだね。ほかにルート66を歌ったジョン・メイヤーやチャック・ベリー曲を持ってきていた。まさか、そんなことをしていたとは知らなかったよ。



アメリカモーターホーム 親子旅

George Cockle
in the U.S.A

怒りの葡萄、イージーライダー……
アメリカ人の心に染み込んだルート66

Scene 06

Get Your Kicks on Route 66

アメリカ人なら、ルート66に憧れを抱く人も多いだろう。僕もそのひとりだ。もし実際に訪れるなら、映画『CARS』を観てからがいい。ルート66をモデルにした映画で、実際に訪れて描いているから、リアリティがあるんだ。ロケハンで訪れたときのサインがあるお店もある。

ルート66とはそもそも、アメリカの西には昔、人が住んでいなかったから、人々が移動ができるようにと国が作った道だ。シカゴからサンタモニカまで、1本で行かれるように。そして小説「怒りの葡萄」や映画「イージーライダー」の舞台になり、ロマンのある道としてアメリカ人の心に染み入ることとなった。

現在のルート66はそのままハイウェイとして使われているところもあるし、今のハイウェイと平行して走っているところもある。通り沿いにはオットマンみたいに昔の古い街がまだ残っているところもあったり、廃墟と化した街もある。それもアートのように絵になっているから、結構人が訪れている。ガードレールなんか何もなく、クネクネと曲がりくねった道は車が落ちるんじゃないかと思うほどだ。実際、落ちて錆びたまま転がってるクルマも見たよ。ルート66にはツーリストもいるけど、実際に住んでいる人もいる。今回はね、ルート66沿いで土地を売っているエリアもあったよ。思わず買おうかと思ったね。

Anyway, ルート66はアメリカの文化に染み込んだ道だ。僕の父は本当にルート66を使って家族でシカゴからカリフォルニアへと引っ越してきた。そしてずっと僕にルート66の話をし、実際に父と僕は旅をした。そして僕も息子のブルーと一緒にルート66を旅した。親子4代続くルート66の旅。ブルーにそういう日が来るのだろうか。



今回は4日目にユタ州とアリゾナ州に隣接するモニュメントバレーに一泊した。見渡す限りの赤土と、小高いレッドキャニオンに囲まれた宿泊施設“GOULDING'S”は、ずっと泊まりたかった場所だ。昼頃からモニュメントバレーを走り続け、月がキャニオンから現れる頃、そのRVパークに車を止めた。そして僕はひとり朝早く起きて、砂漠の空気を味わいたい、そんな念願をやっと叶えた。空の広さが際立っていた。海の上で見る空より、岩があるからこそ、広さを感じさせる。壮大なスケールの景色が目の前にあった。その空気を吸って僕はアメリカにいるんだと実感した。今もネイティブアメリカン“ナバホ族”が住むモニュメントバレーは、レストランでもアルコールは出さない。彼らはアルコールに弱く、それについていい歴史がない。だからアルコールは口にできない、禁止されているんだ。独立国家だしね。

ところで、今年の初めに知ったことなんだけど、僕はネイティブアメリカンの血が流れているんだ。1/8ね。どうやら曾おばあちゃんがそうらしい。僕の妹が調べ出した。曾おじいちゃんは晩年に奥さんが亡くなったあと、ネイティブアメリカンのお手伝いさんとできてしまったらしい。それでおじいちゃんが生まれた。その昔、ネイティブアメリカンの村でそこに住む女の人たちに「あなたは絶対ネイティブだよ」といわれて笑ってたんだけど、ホントだったんだなって、今さらながら驚いた。僕の顔見て、そう思う？

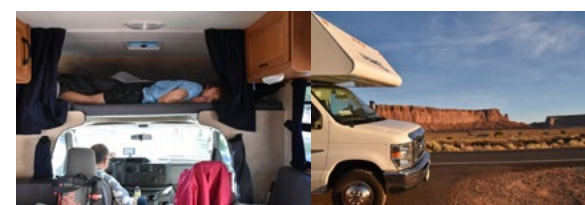
Blood, Sky and Valleys **Scene 04**



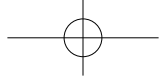
念願のモニュメントバレー。
朝焼けのなかにアメリカを思う

Scene 05

Sleeping in The Desert



キャンピングカーでの旅は、僕にとって2回目。以前は男同士だったから、ワイルドだったけど、今回は家族での旅だったし、いつも顔を合わせるからまるで家が丸ごと移動しているみたいだった。そもそもキャンピングカーがそういうもんだしね。キッチンもあればテーブルもある。シャワー、トイレ、ベッドもあるからね。いつでも眠れるし、設備も簡単なので、便利だった。でも、何よりいいのは、ドアを開けたらすぐ外に出られることだ。ホテルだと外に出るまでいろいろプロセスがあるけど、キャンピングカーは違う。モニュメントバレーでは、ドアを開けると砂漠だった。そしてRVパークに泊まれば、それぞれのキャンピングカーにバーベキュービットが用意されているから、途中で買った食材を夕食にしたりね。ステーキ肉を焼きつつ、そばのスーパーで手に入れたビールを片手に、月明かりの下で過ごしたよ。



Scene 07

Hello, My Friends

アメリカはいろんな人がいて当然の世界。メルティングポットって呼ぶんだけど、これはごちゃまぜという意味で、それがアメリカ。それぞれプライドがあるし、尊重してるからこそ、オープンでフレンドリーなんだ。

実は今回、旅の最終日にロス郊外にある友人の家に泊まった。韓国に住んでいた中学の頃の友達夫婦だ。奥さんのベティは同級生でネイティブ・アメリカンの血が入っているアメリカ人、旦那はひとつ先輩で沖縄とアメリカのハーフだ。その頃からつきあってたんだから、すごいね！僕たち、何十年もつきあいはなかったんだけど、ある時、フェイスブックで突然、友達リクエストが届いたんだ。娘が日本に来たときは鎌倉を案内をしたりもした。それで今回もアメリカをキャンピングカ

ーで旅していると写真をアップしたら、それなら遊びにおいでよ！とメッセージがきた。家族に話したら、楽しそう！となって、迷わず遊びに行った。夜9時すぎにも関わらず、サラダやピッツァ、スイーツまでいろいろなものを用意してくれていた。朝もビュッフェでトルティーヤやサラダ、ヨーグルト……。鹿やハミングバードが現れる広い庭での朝食は気持ちよかった。ブルーもいい経験になったと思う。日々を楽しむようなアメリカの暮らし。そして大人になったと思ったのは、僕たちと一緒に会話しながら食事をしてたことだ。以前ならひとりですまらなさそうにしていたからね(笑)。もしかしたら、旅がブルーを大人にしたのかもしれない。アメリカでの経験、彼の人生でも欠かせないものだったんだろうね。うん、そうだといいな。

Infotmation

モーターホームの旅はトラベルデポ

ジョージ・カックルさんの旅をサポートするのが、アメリカのモーターホームの旅をプロデュースする旅行代理店、トラベルデポだ。人数、日程、行き先に応じてオーダーメイドの旅を提案してくれる。

問/トラベルデポ 0800-123-1776 <http://www.motor-home.net>

アメリカモーターホーム 親子旅

George Cockle in the U.S.A

